

藝 術 大 意

人は動物也、善に不動時は必ず不善に動く、此念此に生ぜざれば彼念彼に生ず、種々轉變して不止者は唯人の心也、本來無物の心体を悟て、直に自性の天則に率ふ事は心術に深くして學の熟せるに非んば不能處なり、故に聖人初學の士には、専ら六藝を教て、先づ其器を成し、是より推して大道の心法に達せん事を欲し、玉ふ幼年の時より六藝に遊ぶ時は志主とする處有つて、自ら鄙倍の辭氣の遠ざかる玩物嬉戲の此心を淫する事なく、放僻邪侈の此身を危する無し、外に筋骨の束を固くして、國家の用を成す、少しく君恩を忘れざる所有るか、達して心術を證する時は、大道の助と成る、一藝少なりとして輕んずる事勿れ。亦藝を以て道とするの誤ある事勿れ、六藝は大道の一端也、古は六藝を以て道義を養ふ、故に孔門の諸賢皆六藝に遊で心術を證す、藝術と雖も精義神に入る時は大道に通ず、今藝術を修する者は不然、專に藝を主として道義に合ふ處ある事を知らず、偶々其理を得る事あれば、天下此外に道無しと思へり。故に一藝に私して他と融通する事不能、其說所なす處皆善也、と雖其大道に達せざるが故に此を以て道義を助る事不能、却て我慢爭心を生ずるのみ、今も道義を主として藝術を修せば、小藝と雖、心術を證する助と成る可し、一念の異千里の違ひ也。藝術を事とする者は形の自然に従て、筋骨の束を正

し、此氣を收めて、体に盈しめ、偏もなく、倚もなく、融通活達にして、其用自在ならん事を要す、能く修する者は相に涉らず、念を動かさず、往くに象なく來るに迹なし、故に其妙用神の如し、相は氣の象ちの外に顯るゝ者也、念は氣の内に動く者、此念僅に動く時は倚る處あり、倚る處有る時は心体自在成らず、心体自在成らざる時は相に顯る、相に顯るゝ時は迹有つて見つ可し、念は心に依ると雖、僅に動く時は氣に涉る能く氣を修する者は事に付て念を動かさず、或曰、此れ逆也、心は本也、氣の主也、氣は心に隨ふ者也、故に心に安んぜざる處ある時は念動く、念動く時は氣從て動く、然るに氣を修する者は念を動かさずと云ふは何ぞや、云く然り、大本上より見る時は心は主也、氣は心に從ふ者也、故に孟子氣を養ふの論、只志を持するに有るのみ、別に養氣工夫なし、然れ共、一藝を事とする者、其術に於て氣の自在を得る時は、其事の念は動ぜざる者也、如何となれば、心は氣に乗じて用を成す、氣靜なる時は心自ら靜也、此も又一術なり、例ば人の舟に乗るが如し、舟堅固なる時は乗る者安くして能く水を渡す、常人は一つ橋の危きを渡る時、膝震ふて足自在成らず、水練に達したる者は大路を走るが如し、此れ心の別なるにも非ず、利たるにも非ず、水に投じて死せざるの術を知る故に神氣定つて此の念動く事なし、故に此自在を成す、藝術を事とする者、危きを犯して動ぜざる事は、水練に達したる者の一つ橋を走るが如し、神氣定つて念動かざる故に此心自在にして、其用神の如し、是れ士卒備りて將安きが如し、他の事に於ては念

動き氣平か成らざる者は道義より不入が故也、幽明生死一貫の理より修し得て無我無欲の心
体を認知したる者は又別なり、例ば良將の練卒を指揮するが如く、東西南北自在成らずと云事
無し、氣を修して念を動ぜざる者は練卒庸將を助て功を立るが如し、將陣法に達せずと雖、士卒
勇謀の働に因て備へ危からず、故に將惧る事なし、將不臆故に士卒亦働を成し安し、然れ共功は
士卒に在のみ、夫劔術は不得止に起る者なり、不得止者相迫る時は勝負なき事不能、天地の間陰
陽相迫つて而て進む者仲る者は勝也、相迫て而て退く者屈する者は負る也、天地は無心にして
只陰陽の昇降の自然に任ずる而已、陰陽昇降中に大極有つて存す、大極は至誠の理也、色も無く
形も無く聲も無く臭も無し、只陰陽の主と成て、感に従て風雷雲雨を起す也、萬物を化生する而
已、事を用る者は陰陽の氣也、勝負は其應用の迹也、理氣相乗じて不測の靈妙を成す、是を神と云
ふ、此心の本体寂然不動にして、色も無く形も無く聲も無く臭も無し、何の一物の蓄へ有らん、無
物なるが故に氣靈明に乗じて不測の妙用を成し變化自在を爲す、若し僅に生を好み死を惡み
勝負を争ひ期必の心ある時は、私智計功の念生ず、私念僅に生ずる時は、一物心頭を縛して本体
自然の靈明を壅ぐ、此所理は、聞て知り易けれ共自修、精しきに非れば内に徹し水を飲て冷暖自
ら知るが如く成らざれば、只心体の噂さ而已也、自ら試て知る可し、靈明の物の爲に塞るゝ時
は、豁達自在の氣其道を失ふ、強弱偏倚の心体二つと成る妙用何れの處にか生ぜん、如此者は闘

て敵に勝つと雖、只打合の功者とは云ふ可し。劍術の眞を得たる人とは云ふ可からず、僅に勝負の念動せば何ぞ必死の義士に敵せんや、此所我か心頭を搜し内に、試て自ら知る可し。

只理を聞たる而已にては内に徹し難し、故に劍術は勝負の事也と雖、争ふの念動ぜざるに任せて其自然に従ふ而已、此にしも此に念を住むる事無し、如此は心体の靈明を塞ぐ者無く、此氣も又靈明に従て豁達自在也、体は氣に従ふ心体一也。敵の中を往來する事曠野を走るが如し、己れに碍る者無ければ也。心自在なる時は氣も又自在也、氣自在成れば、体又自在也、些も塞る所有る時は我心却つて敵の助と成る、問ふ然らば進退前後縱横順逆の事を務むる者は無益の義か、云く事は劍術の用也、其用何ぞ捨つ可けんや、事の理を不知時は用不足理は頓に悟る可けれ共、事は習熟に非れば氣こはく体自在成らず、不教の民を戰はしむるが如し、夫形無き者は形無きを以て修し、形有る者は形を以て修するは自然の理也。然れ共事は理に依て生ず形無き者は形有る者の主也。造化に通じて知可し、故に習熟の後些も此に心を住む可からず、僅に心を住る時は念に涉る念に渡る時は、氣倚る處有りて豁達自在の妙用を失ふ、只勝負の念を去て感の儘に動く時は送迎する處靈明塞る處なし、靈明塞ぐ者無き時は事は修練に従て自然に應ずる而已、何の心を住むる事有らんや、古語云眼裏有塵三界窄心頭無事一生寬眼中に物無き時は明らか也、塵沙僅に入る時は東西を分つ事なし、心は物無きに困て廣大也、意念僅に心頭に横た

はる時は塞る處有て、天地も窠窟の如し、心塞る時は氣も亦塞る、氣塞る時は心体自在成らず、我心に却て我を累はず、易曰無思無爲寂然不動感而遂通於天下之故造化不測の妙用聖人大道の心法此一語に盡せり、寂然の不動は念を凝し情を斷て枯木死灰の如く成るには非ず、無我無欲の心体素より一物の蓄る無し、此中に不測の妙用有り、無聲無臭感じて遂に天下の事變に通ず、心頭を澄して此心の變化を見る可し、天地空々として無物の處より能く風雷雲雨を起し、萬物を造化するが如し、思て可得者に非ず、爲て可取者に非ず、自然の体也、天地の廣大なるも陰陽僅に偏倚する處有れば五穀不登、人者小体也一念の執滯一身の碍と成る事を可知、劍術の理も亦此に外ならず、心体無物にして能く變化自在を成す、渾然無事の心体には我も無く敵も無し、我無きが故に往くに象無く來るに迹無し、此處に至ては師も傳る事不能、弟子も受る事不能、況や言説の盡す處ならんや。以心傳心とも云可し、師は其道筋を傳る而已、自得の所に至ては他人の與り知る處に非ず、名師と雖是を如何共する事不能、況や孔子曰仁を爲すは己に由る人に由らんや、聖人と雖人に道を悟らしむる事不能處也、其極則は自修に有る而已、僅に我有る時は敵有り、敵有る時は角敵とは、もと對峙の名也、故に我相手を敵と云ふ、陰と陽と前と後と上と下と西と東との類皆敵也、形象有る者は必ず對する者あり、對すれば必ず角ふ、我が心に象無き時は、對する者なし、對する者なき時は角ふ者無し、是を無敵と云ふ、聖人心体を名付て中と説玉ふも對

無きの義也、東西南北四維各對有り、只中と云へば對なし對なき時は不偏不倚は勿論也、天地無心にして克く風雷雲雨を起す、天豈此の風雷雲雨を蓄る事をせんや寂然不動無物の心体より感じ來て此氣起る、散する時は去て迹なし、人の死生も亦如此、只生死のみに非ず心の變化も又如是人心寂然不動の心体もと一物の蓄る無し、故に此靈明を成し此妙用を成す、些も蓄る事有る時は氣も又其處に片寄る、此の氣僅に倚る時は豁達自在なる事不能、向ふ處は過にして、向ざる處は不及也、過なる者は勢あざれて不可止、不及なる處は餒て用を成さず、共に變に應ず可からず、又自修して後初て可知、老子曰常無欲以觀其妙、常有欲以觀其竅、無欲とは寂然不動の心体、有欲は七情變化の迹也、妙は此の心の妙用也、竅は其由て出る處の大本を云ふ、寂然不動無聲無臭の心体を認知する時は造化の大本一物蓄を離れて雲行き雨施て品物形を流し不測の妙用を知る、造化既に行はれ品物形つて流所に於て此心の妙用通達自在不測の變化皆無物の天真より來て元、一物の蓄無きを觀る可し、有の妙用を以て無の大本を知て有の妙用を見る造化に通じて人心に達し人心に達して造化に通ず、幽明生死一貫也、易に深き者可知也、文字無きと雖、今日目に見る處の寒暑往來陰陽變化の所に就て、我が心頭に尋心の變化の所を試んには何ぞ自得の期莫らん、千萬人の敵の中に在て此形は微塵に成る共、此心は我物也、大敵と雖是を奪ふ事不能、此念動ぜずんば手を空しては死す可からず、劍術を學ぶ者は初學より此に心を付く可

し、私念僅に發る時は生死に迷ふ、必勝は理に在て事に非ず、例へば水は火に勝つは必勝の理也。然れ共、物の勢熾なる時は理を壓する事あり、一盃の水を以て一車薪の火に勝事不能者は火の勢盛なる故也。是を見て水は火に不勝とは云ふ可からず、又石は重して水に沈む者也。然れ共、洪水大石を流す、是を見て石は水に流るゝ者とは云ふ可からず、只必勝の理に任せて必勝の念を生ずる事勿れ、僅に念を生ずれば敵立形象者は生死にも不與、況や勢に屈す可けんや、形無きが故に敵無し、此所又以心傳心なり、或曰、寂然不動にして、感じて天下の故に通ずる者は天理一体の聖、當時誰か其妙所に至る者あらんや、曰く、予が云ふ所は其全体を語り、其至極を論じて道の窮り無き事を云ふ而已、必聖人の心地に非ざれば、藝術の極處に至る事不能と云には非ず、唯劍術而已にも非ず、六藝みな道体の一端にして、心術を助くるの器也、故に其至極を論ずる時は道と合す、然りと雖、僅に一藝術也、故に其器に中たる人、生死を忘れ、其術に志を用る事深く、修練の精義神に入る時は、其一術の妙所には至る事有る可し。然れ共、心を用る事を一術にのみ専らにして、心術を不知人は、大道に通じて修する事不能、大道に通じて修する者は、始より志立て神定まり、術は漸々以て熟す可し。故に初學と雖、分に應じて益有て此に役せらるゝ事無し。道術に通ぜざる者は、此に役せらるゝを以て身の樂とす、少しく得る事有れば、却て我慢争心を助けて、豁達自在の心を若しめ、身の禍を招ぐ、三代の古へ未だ劍術の名無し、戰國の時に劍士あり

其術を試むと雖、其道の自然に由らず、皆相打て勝事を務る而已、只莊周か鬪雞の論而已、暗に劍術の極所を悟る、古は六藝を以て道學の助とす、未だ劍術の名無しと雖、射術の中に全く劍術の理備れり、古は射を以て其人の徳を知ると云へり、今の劍術も其体は治の備にして心術を證し其用は士たる者生死の間に用るの術也。何ぞ私意を用ひ争を生とせんや、曾參の篋を易へ子路の冠を正すの志無くば、例へ其成す所、神道を得たりと云ふ共、劍術の眞に非ず、只生死に心なく、事は修練に任せ疑を變じて進む時はたとひ其術未熟にして、此形は微塵に成る共、此心に於て動ずる事莫くば、劍術の眞を不失事然あり。此れ初學より極處に至る迄の志なり、其事は血脈を通じ筋骨を健にし心氣を修するの術也、務む可き哉○餘意、水練に達したる者は克く舟を掉す此れ他なし、江河を見る事陸地の如し、舟覆て水に投すと雖、陸地に轉するが如し。其危き事を不知故に水を忘れ、我を忘れて只心の趣きの任也。神定りて克く此自在を成す、世間劍術の人も多年此術に志を用て氣を練り事を修し勝負機を明にして後、百度人と試て危き事なし是を以て一毫も疑ふ事なし、故に、神定まりて内靜なり故に敵を忘れ我を忘れて只心の趣きの任也。水練に達し居る者の舟に掉すが如し。故に其術に於ては自在を爲す事神の如し、然れ共、正道を不聞人は其然る所以を不知、只此一術の道理のみ如此と思へり。此氣象を認て道とする者の類なり。己一人是の理を知れりとして秘して別の器とし終に常と合する事を不知、

天下此外に道無しと思へり。理は天地の理也。皆明德あり、豈己一人是を知て人皆知らざらんや。形は氣を以て動き、氣は心に從つて動く、心は何者ぞ、書住曰此氣靈明天理を具へて、一身の主と成る者は心と云ふ、然り只如此見て過る時は是心の噂さ而已。直に心頭に尋入つて其妙用變化の所を見、自ら試み是に由て尋て其本体を認知て疑ふ事莫く、惑ふ事莫く水を飲で冷煖自ら知が如なるに非れば心を知たる人とは言難し。既に本体を認知る時は妙用變化の由て來る處を知る。是を知る時は造化に通ず、幽明生死疑ふ事なく惑ふ事なし。此に於て篤く信て其本体に從ひ外物の爲に累はす者莫く、天地は吾天地也。世界は吾世界也、天下我心に碍る者莫くば今世に生れたり共、己一人は堯舜の民たる可し、法華には是を娑婆即寂光淨土と云ふ、此心を以て藝術を修せば妙用自然に得べし。これ高上神奇玄妙の事に非ず、初學と雖篤く信じて始より志を此に用ひば神定り氣平にして分に應じて益有る可し。是れ古の學術也。今の人は信不篤、故に志堅固成らず外誘に惹れて心法の事は企て及ぶ可からずとして、自ら盡して不進のみ、只意識の才覺を用ひ即功を立て終始を不省、古人を迂也として時の間に合するを以て自知有りとす、是を小人の中庸と云ふ、人として吾が心体を不知は我にして吾に非ず、物に惹かれ動き物に惹れて止る、生涯物に使はれて是を以て自樂とす、物を使ふ者我れか、物に使はるゝ者我が自得す可し。人皆情欲は素より物に使はるる者にして、心の客なる事を不知、此

處は心頭に尋入て自ら試む可し。心体を見るの工夫は務めて妄情を去るに在り、妄情は惑を根として物欲に生ず、欲動き妄情心体を縛する時は本然靈明是が爲に蔽はれて惑ひ愈々起る、故に意識の方覺事を用て心の妙用自在成らず、物に惹れて動き、物に惹れて止る、動も吾動に非ず止るも吾止るに非ず、情を蓄しむる者なる事を不知、只情欲にのみ従ひ意識の才覺を以て自知として、是に惹れて日々に苦境に入て出る事を不知、役々として生涯を終ふ、偶、道を聞て暫く悦ぶと雖、妄情意識是を妨る故に心体を觀んと欲るの志有りと雖、途を塞で入事不能、常に物欲を制し惑ひを解て、心法の手を下す處とす。此れ其大略也、前に論する如く理は聞て知り易けれ共、妄情迹より起る妄情起る時は惹るる處有て終に其意を失ふ。初學は此に於て退屈する事あり、不篤が故なり。

(藝術大意大尾)